教え子から保護者へ

校　長　　武井　正明

28 年前の西蒲原の中学野球は、ダントツで巻西、次いで分水、燕、吉田といったところだろうか。とにかく北信越常連校の巻西は、吉田近郷大会の決勝で負けた後、１時間以上も選手全員がポールとポールの間を延々とランニングしていたのを憶えている。
その頃は自分が岩室中の主顧問。部活指導は「子守り」だと思っていた。だから全然強くもできず、チームワークも育てられず、まさにどっちつかずの三流顧問だった。

その後、現燕中の若林丈二先生が来てから、岩室中野球部は総てにおいて一変する。
練習内容も、子ども達の心も技術指導も何もかもだ。私がこんなものだろうと値踏みしていた子どもたちが、みるみる上達し、試合で勝っていく姿にショックを受けた。

その後、私は巻東中に異動する。そこでの指導はほぼ全部、若林監督の請け売りだ。
そして隣の岩室中は、目覚ましい快進撃を見せることになる。
その象徴的な試合がある。忘れもしない、城山球場で行われた岩室対巻西の一戦だ。
互いに県大会進出を決めての準決勝。がっぷり四つの好ゲーム。岩室中のエースは私があこがれていた投手と同じ苗字の子だった。口数は少なく、芯は強く、素直ないい子だった。入学時から、少しアーム式の腕の振りで、伸びのある力強い真っ直ぐを投げていた。彼の球を受けるのが楽しかった。時は経ち、彼は岩中の大黒柱となっていた。
その彼が、なんと、あの巻西を２－０で見事完封したのである。本部席から観ていた。目の前では信じられない光景が広がっていた。まさに快挙、素晴らしい投球であった。
その試合の投球フォームは「広報いわむろ」の表紙を飾った。しっかり胸を張った、リリース直前の堀内恒夫と重なる彼の白黒の写真は、今でも目に焼き付いている。
吉田中野球部保護者会現会長も、当時吉中３年。３位で吉中も県大会出場を決めていたことを昨日知った。

その彼が、吉中の保護者だと、先週末に知った。
思わず電話を掛けた。「憶えていてくださるとは思っていなくて…」電話の向こうで大人に成長した彼の、はにかんだ笑顔が浮かんでくる。憶えているに決まってるじゃないか。嬉しいなあ…。教え子の子どもが、自分の学校に入学してくれるなんて。教え子から保護者へ。子から孫へ。世代のバトンは着実に渡されている。こんな嬉しいことはありません。

そして 10 日吉中野球部 YBC は、見事新潟県四強となり、昨年は叶わなかったエコスタへ舞台を移す。「必ず連れていきますよ」有言実行の吉中ナインに大感謝だ。
24 日は何が何でもエコスタに行く。対戦相手は、昨年苦杯をなめた強豪聖籠中。大江監督とは旧知の仲。縁を感じる。相手に不足はない。
吉中ナインがエコスタで暴れまわっている雄姿を、目に焼き付けてくるつもりだ。